

一人の台湾人の残した従軍感想記録

— 南支派遣部隊附陸軍臨時通訳として —

中 田 敏 夫

はじめに

廖德聰という清国人として生まれ、日本人となり、そして中華民国人としてこの世を去った一人の台湾人がいた。彼の一生は特別に歴史に名を刻んだり、語り継がれたりするようなものではなかったが、時代の流れの中で家族と地域に寄り添って闊達に生きた一人の人物であった。1891（明治24）年生まれこの人物の事績は中田・廖（2011）に紹介しているが、このような事績を描けたのも、廖德聰氏自身が残した多くの日本時代の資料があったことと、子息である廖繼思氏が記憶にとどめてきた父德聰氏の雄弁な語り、親類縁者から聴き取った話があったからであった。氏が残した日本時代の資料には、台湾公学校教員免許状や訓導としての辞令といった証書関係、家族写真や学校での集合写真の類、そして氏自身の執筆による原稿が2点と履歴書の写しがある。原稿の1点は、台湾総督府国語学校師範部乙科在籍時代に修学旅行をした際の滞在記であり、すでに「内地旅行日記」として中田（1998）で紹介している。もう1点が本稿で紹介する「従軍感想記録」となる。

実は氏は、履歴書の写しを2点残している。この2点はともに1913（大正2）年の国語学校卒業に始まり、1940（昭和15）年三井物産天津支店勤務で終えるもので、書き込みや訂正もみられ日本時代の同じ時期に書かれた手控えと思われる。記載内容もほとんど異同がないのだが、一点だけ従軍の経歴を一つには記載し、一つには記載していない点異なる。德聰氏が従軍経歴を履歴書に記載しなかったのは職業としての経歴でないことを考慮したからであろうか。中田・廖（2011）に載せた写真版は南支派遣が記載されていない方であったが、中田・廖（2011）の本文中では廖繼思氏がこの従軍の事実を紹介している（後述）。

今回この原稿は廖繼思氏から提供を受け公開が可能となったが最近まで事が事なだけに、繼思氏もためらわれていた。なぜ今許可をいただけたかは明確にお聞きしていないが、一つには、日本軍による徴用であったとは言え日本政府に協力した事実は戒厳令解除後も、廖家の親族への波及の危険性を考えれば公表することはできなかったかと考える。それが台湾では民主化が進み、植民地時代の行動としてやむを得なかった事実として受け入れられる状況になったという判断があったのではなからうか。もう一つは、日本政府に協力した形となったとはいえこの草稿を德聰氏が戦後も保管し続け繼思氏に残したのは、日本時代は自分の人生の一つの真実でありその生きた一つの証として捉えて

いたからと考え、公表することが自身の務めであり父への礼儀と考えたということもあろうか。

さて、1937（昭和12）年7月蘆溝橋事件発生以後、日本政府は中国大陸において戦鬪を南へと拡大していった。『戦史叢書 1号作戦<3> 廣西の会戦』（防衛庁防衛研修所戦史室 朝雲新聞社 1969年）には次のようにある。

大本營は昭和13年秋、武漢作戦と時を同じくして廣東を攻略することとし、八月二十二日の武漢攻略命令（大陸命第一八八号）に次いで九月十九日、大陸命第二百号をもって第二十一軍および第四飛行団の戦鬪序列および編成を号し、同日大陸命第二百一号をもって廣東の攻略を命じた。（中略）第二十一軍は、軍司令官古莊幹部中將の指揮する第五、第十八、第四百の各師団および第四飛行団を基幹とするものである。（中略）第二十一軍は海軍と協同し、澎湖島馬公付近に集合し、軍の主力をもって十月十二日白耶士湾に上陸し、惠州-増城に沿う地区を途中重慶軍を撃破しつつ一挙に十月二十一日廣東を攻略し、且つ粵漢線を遮断した。また、第五師団は海軍陸戦隊と協同して虎門要塞を攻略し、珠江を遡航して佛山付近に進出した。かくて軍は早くも十一月初頭には廣東付近の要域を制圧占拠した。（2-3頁）

廖德聰氏はこの日本軍の廣東攻略戦線に「陸軍臨時通訳」として、およそ3ヶ月弱徴用されている。本稿は、氏がこの従軍の様子を「従軍感想記録」として書きとどめた原稿を紹介するものである。

1 執筆者廖德聰氏について

廖德聰氏の経歴を中田・廖（2011）により簡単に紹介しておく。氏は、1891（明治24）年11月11日、台中州大屯郡西屯庄上石碑生まれの男性である。台中廳西大墩公学校を明治42年卒業する。第一回目の卒業生で、この年の卒業生はたった3人だった。公学校は都合6年の在校だったと考えられるが、入学の年齢、卒業の年齢は正確にはわからない。卒業後、全寮制の台中農事試験場の講習班を経て、1909（明治42）年台湾総督府国語学校師範部乙科に入学する。1913（大正2）年3月25日22歳で同校を卒業と同時に、西大墩公学校に奉職する。6ヶ年公学校に勤めた後、1919（大正8）年4月1日退職する。その後は、信用組合書記、西屯庄助役・副議長、会社員（事務系）などを勤めた。以下、德聰氏自身が美濃紙に毛筆で記した履歴書の内容を示す（中田・廖（2011）に写真版で載せている）。

大正2年3月25日	台湾総督府国語学校師範部乙科ヲ卒業ス（台湾総督府国語学校校長）
同年3月28日	台湾公学校乙種訓導ヲ免許ス（台湾総督府）
同年3月31日	台湾公学校訓導ニ任ス月俸十七円ヲ給ス（同上）
同上	西大墩公学校勤務ヲ命ス（台中庁）

大正6年5月10日	大正六年台湾総督府ニ於テ施行シタル文官普通試験ニ合格セリ (試験委員長)
大正8年4月1日	依願本職ヲ免ス (台湾総督府)
大正8年4月1日	書記ヲ命ス月俸二十五円ヲ給ス (西大塚信用組合)
同年11月9日	依願書記ヲ免ス (同上)
大正8年12月1日	書記ヲ命ス月俸四十円ヲ給ス月手当四十円ヲ給ス (林本源第一房事務所)
同上	八重山波ノ上炭鉱事務所会計主任ヲ命ス 同上
中華民國9年 (大正9年) 5月20日	福建省惠安県漁民郭合順等三十一人漂流シタルヲ救助セシヲ以テ中華民國駐長崎領事 ■■■ヨリ感謝状ヲ受ク
大正10年5月1日	会計係勤務ヲ命ス (同上)
大正10年7月1日	農務係勤務ヲ命ス補桃園租館主任 (同上)
大正11年3月31日	依願書記ヲ免ス (同上)
同年4月1日	西屯庄助役ヲ命ス月俸六十円ヲ給ス (台中州)
同上	副議長ヲ命ス (大屯郡役所)
大正12年4月1日	州税調査委員ヲ命ス手当金二十円ヲ給ス (台中州)
大正13年3月7日	第一回産業組合講習会ニ於テ本会所定ノ左記科目 (産業組合関係法、産業組合ノ経営、産業組合ノ簿記、手形法) ヲ修了 (台湾産業組合協会会頭)
大正15年3月6日	依願助役ヲ免ス (台中州)
自大正15年4月1日至昭和2年10月10日	蘭領東印度瓜哇島ニ於テ農産物仲買商ヲ経営ス
昭和2年12月1日	書記ヲ命ス月俸八十円ヲ給ス (宿舍及食事附) (大雅庄下横山張裕昆堂)
同上	庶務係及会計係勤務ヲ命ス (同上)
昭和4年11月30日	依願書記ヲ免ス (同上)
同年11月30日	支配人ニ選任ス月俸百十円ヲ給ス (東華名産株式会社)
昭和5年6月30日	依願支配人ヲ免ス (同上)
同上	書記ヲ命ス月俸五十三円ヲ給ス (宿舍及食事附) (大安産業株式会社)
同上	庶務係及会計係勤務ヲ命ス (同上)
同上	書記ヲ命ス月俸六十五円ヲ給ス補缶詰部及山林部主任 (霧峰三五産業公司)
昭和8年2月10日	依願書記ヲ免ス (同上)
同上	依願書記ヲ免ス (大安産業株式会社)

同上 主事ヲ命ス月俸百円ヲ給ス（西屯信用購買販売利用組合）
 昭和 15 年 3 月 6 日 依願主事ヲ免ス（同上）
 同上 嘱託ヲ命ス月俸百円月手当五十円月宿舍料二十円ヲ給ス（大東信託株式会社）
 昭和 15 年 3 月 6 日 補企画部及不動産信託部主事事務取扱（大東信託株式会社）
 同年 6 月 28 日 依願嘱託ヲ解ク（同上）
 同年 7 月 3 日 顧問ヲ嘱託ス（西屯信用購買販売利用組合）
 自昭和 15 年 10 月 3 日至同年 12 月 30 日 北支旅行中三井物産株式会社天津支店臨時嘱託ヲ命セラレ米穀検査ヲ担当ス月手当金三百円ヲ給セラル（宿舍食事附）

<次はもう一つの履歴書に記された南支派遣の事項。昭和 8 年の記事の後に記載されている>

自昭和 13 年 10 月 28 日至昭和 14 年 1 月 10 日 台湾軍司令部ノ徵備ニ応シ陸軍通訳官ヲ命セラレ南支派遣三宅部隊古賀部隊根東部隊ニ従軍ス
 北京から帰って終戦までの 5 年間の経歴は継思氏もよくわからないとのことである。戦後は、西屯郷郷長、能高区、精米工場の経営、私立商業学校校長、無尽会社員林代理支店長などを経て、1962 年 1 月 31 日亡くなっている。

以上が徳聰氏の経歴である。継思氏は中田・廖（2011）で、父のことを「履歴書から、徳聰がこごぞというところで、外部の原因で折角の機会を度々失っていることがわかる。ただ、徳聰本人はよくよしない性格だったから、その度に拾ってくれる人が現れて難関を切り抜けている。結論からいうと、金持ちにはならなかったが、食うには困らなかった、ということになる。」とまとめている。

2 従軍感想記録について

本原稿は、標題に「従軍感想記録」とあり、「南支派遣濱本（三宅）部隊古賀部隊根東部隊附 陸軍臨時通訳廖徳聡」（注）とある、カーボン紙を使って「西文具店印刷」という名の入った罫紙 16 枚（縦 25cm×横 30cm）に複写された手書き原稿である。複写された物が保管されており、本体は帰台後、軍ないしは役所に提出されたのが現存しない。「覚え」で書いた可能性もあるが、本文中の「其の疑が氷解スルデセウ」（5・表）とか「英米ノ海軍ヲ縮少シテヤツテハ如何デセウカ」（6・表）という時折紛れ込む「ですます体」をみると、何らかの機関に提出されたことをうかがわせる。

本文は次の構成で執筆されている。

- 1 招集ヲ受ケテ
- 2 営中生活
- 3 輸送途中

- 4 任地ニ着テ
- 5 戦地生活
- 6 通訳勤務
- 7 見夕地方ノ産業
- 8 実戦参加
- 9 銃後国民ノ覚悟

これらは時系列的に書かれているが、日記形式で書かれたものではなく、招集を受けたときの様子に始まり実践参加の経験まで、そして銃後を守る国民としての覚悟を、「感想」として記したものである。単に戦況の報告や戦闘の過程を記すのではなく、従軍で出会った種々の体験、印象が素直に書かれている。47歳という年齢での徴用であったためか、また通訳としての任務であったためか、自己のそれまでの経験と考えに従い、落ち着いて状況を客観的に評すという姿勢が見られる。一例を挙げれば、「7見夕地方ノ産業」は次のような記述となっている。

広東の東北一帯は粘土質が多いが甘蔗はよくできる。新式製糖工場もある。製糖業は有望だ。米もできるがサイゴン米に近い貧弱な品種だ。施肥も少量の自家肥料だ。米種を改良して施肥すれば米産の前途は洋々たるものだろう、バナナも有名だが米同様に感じる。名果荔枝は広く栽培されている。パインナップルもできる。缶詰業を盛んに起こせば一層有利になるだろう。キャッサバは早くからあると見えて集団栽培はみえないが自家用として甘藷に混植したのが少なくない。甘藷も概して旨い。澱粉工業も有望だ。造林は政府の奨励で限なく松が植えられてある。相思樹の造林がむしろ有望じゃなかろうか。

然し農民は概して貧困のようだ。大抵の大部落には大質屋が立派に建っているのを見ても分かる。質屋の利率は月三分で年三割六分だ。金利は高い。富農と高利貸しの横行に任せているのは気の毒千万だ。産業の改良が行われぬのも道理だ。合作社（産業組合）の建設運動も相当に省政府が尽力しているが銀行から借金高を先決せねば設立しえない。または設立し得ないと来ては前途遙遠だ。

前段の産業への視点は、氏の公学校卒業後の台中農業試験場での講習経験や、林本源第一房事務所での農務係勤務や補桃園租館主任、蘭領東印度瓜哇島での農産物仲買商経営経験、霧峰三五産業公司での山林部主任等の経歴が育んだものであろう。後段の経済状況への評価もいくつかの会社の会計係の経験が生きている。

ただし、例えば「9銃後国民の覚悟」に記されることばをみれば誇張があったのではないかと思える書きぶりであり、そんな言葉遣いは全体にちりばめられているのも事実である。単なる覚えではなく、何らかの機関に提出する文書として書かれたとすればこのような書きぶりになるのも必然であったか。植民地という状況が皇国国民の一人として天皇・国家への忠誠奉仕が求められたのであろう。

侍従武官御査閲の際我等軍属まで恩賜の煙草をたまわりて家族親戚と共に聖恩の

高きに感激し何時も聖恩の万一に報い奉る心掛けをしているべきだ。

戦敗国の悲惨さを見れば誰でもピント頭に響くのは「戦争は勝つに限る」という一念だ。而して其目的を達するに強い軍人の外に外交の調整、内政の整備も必要でいわゆる国家の総力を強化しなければ困難なことだ。それで銃後の国民としては常に戦地に於ける将兵の労苦を考えて保健に留意し、精神を訓練し、生産拡充を図り消費節約を実行し、物資を愛護して出征軍人の慰問、軍事後援の強化等は寸時も忘れてはならぬのに、贅沢三昧をして平気である無自覚者や時局を悪用して暴利を貪ったり、詐欺強盗を働いたりする不徳漢がいるなら認識不足も甚だしいので実に憤慨に堪えない次第である。

なお、廖德聰氏の従軍について、廖継思氏は中田・廖（1911）で次のように指摘している。

しかし、もっとも大きな事件は、1938年（昭和13年）秋、従軍通訳として召集されたことである。表向きは、広東戦線へ通訳のために200人余の客家語が話せた人を召集したことになっているが、客家人の中でほとんどただ独り福老人（福建系台湾人）だった。国語学校時代に客家語を覚えたのが、なぜか軍部に分かっていたのである。戦地では大隊長付き通訳になったが、最前線にも出動し、弾が飛び交う音も経験しており、大砲の砲弾が開けた穴に隠れたこともある。当時、兵士の間では砲弾は同じところに二度落ちる事はないというジンクスがあるそうだが、それも対アメリカ戦では通用しなかったことだろう。最北は従化（県所在地）まで行ったが、村人が避難して無人になった家々に「此家已被搶三次」（この家は三度略奪された）とまじめに張り札しているのが哀れでもあり、おかしくもあったという。4カ月くらいで召集解除になったが、幸い怪我人もなく、全員無事帰還した。ただ、客家語と広東語は似てはいても完全に通じるわけでもなく、その分は漢字の筆談と持ち前の語学力でカバーした。出征に際して、母の父親つまり祖父が特に戒めた言葉が德聰の回顧文にある。「通訳で間違えるとその人の生死が別れることが少ない。この点常に心せよ」と。

47歳になっていたから、普通ならずで兵役免除の年で召集されたのは、たしかに大事件だった。一族の人がほとんど集まって壮行会をした写真、近親だけで撮った写真などが残っている。貴重な映像である。德聰の分析によれば台湾人の召集に対する反応を観察するための作業だったにちがいないという。

1938（昭和13）年の台湾での軍属・軍夫の徴用がどの程度だったかは調査する必要のあるところだが、德聰氏の分析によれば「台湾人の召集に対する反応を観察するための作業だったにちがいない」という評価がなされているのは興味深い。

注：「根■ ■隊附」は紙が破れていて読めないが、履歴書に「南支派遣三宅部隊古賀部隊根東部隊二従軍ス」とあることから「東部」と読んでおいた。

参考文献

- ・中田敏夫（1998）；台湾総督府国語学校生徒執筆「内地旅行日記」（大正元年）（『国語研究』第6号 愛知教育大学大学院国語教育専攻 1998.3）
- ・中田敏夫・廖継思（2011）；廖継思著『徳聰の履歴書』－清国人・日本人・中華民国人だった一人の台湾人の履歴書（『国語国文学報』第69集 愛知教育大学 2011.3）

[付記] 廖徳聰氏の原稿を公にするにあたり、廖継思氏から1カ所だけ伏せてもらいたいという希望があり、「6通訳勤務」中の1文32字を伏せたことを断っておく。日本軍と住民の行動に言及した個所であったが、廖継思氏のこだわりを感じさせられるものであった。

（なかだ としお）

（資料）

従軍感想記録

南支派遣濱本（三宅）部隊古賀部隊根東部隊附

陸軍臨時通譯廖徳總

一、召集ヲ受ケテ

覺悟ノ前ニ心配ナシ 我ガ帝國ガ支那大陸ニ出兵シテ東亜永遠ノ平和ヲ確立スル為聖戦ヲ繼續スルコト一年有半ニ近キ昭和十三年十月十九日午前十時頃台中市内ニ於テ郷里西屯庄ノ助役様ニ遇ツテ助役様ハ焦燥ノ面持デ曰ク「君ヲ大分捜シタガ中々分ラナイデ困ツタデスヨ」ト、「何か急用デスカ」ト反問シタラ助役「マア店ノ中ニ入ツテ話シマセウ」ト答ヘラレタノデ「ハア召集令デスカ」ト笑ツテ問ウタラ「マア入りマセウ」ト急イデ店ノ奥ヘ入ツテ赤イ紙デ書イタ徵発告知書ヲ示サレタ、「案ノ通りチヤナイカ兎ニ角後事ヲ頼ムゾ」ト笑ツテ告知書ヲ受取ツテ別レタ、突然召集ヲ受ケテ吃驚モシナカツタノハ前以テ覺悟シテ居ツタカラデアル。只心ニ浮ンダノハ折角應召シテ何ノ働キガ出来ヤウカノ一事ノミダ、軍事訓練ヲ受ケテ居ラヌカラ勿論兵ノ一員トシテハ働ケナイ、永年労働シテ居ナイカラ軍夫トシテモ行ケマスマイ、通譯トシテハ中北支ナラ北京語ハ未熟ダシ、南支ナラ台湾ノ廣東語（客語）ノ通ズル汕頭地方ハ未ダ占領シテ居ナイノデ廣東語（廣州語）ヲ使用スル地方ヘ行ケバ相当困難スルダラウ。然シ多少漢文ヲ心得テ居ルカラ萬一ノ場合ハ筆談デ行ケルダラウ、如斯種々想像シテ見ルト本島人ニ生レタ私ハ今年四十八歳ノ半老軀ヲ以テ尚ホ戦地ニ出テ皇軍ノ一員ニ加ハツテ盡忠報國スルコトガ出来レバ光榮ノ至リダト歎喜感激シテ勇躍セザルヲ得ナカツタ。

家ヘ帰ツテ見ルト妻ハ恰カモ留守ダツタ、後顧ノ憂ヲ無クスル為資産負債ニ関スル書類整理中妻ガ返ツテ來テ隣ノ叔父カラ話ヲ聽カサレルト晝飯ノ仕度ヲシ乍ラ「豫想ノ通りデスネ、本人ハ中々ノ元氣デスカラ結構ナコトデスヨ、妾モ良人ノ留守ニハ慣レテ居ル

カラ別ニ何モ心配スルコトハアリマセン」ト云ツテ周章ルコトモ無カツタノハ矢張り平素ノ覺悟ニ外ナラスト思フ。

親戚朋友ハ何レモ軍夫ナラキツカラウ、通譯ナラ申分無カラウト云ツテ私ノ元氣ニ動かサレテ皆喜色滿面デ家族ヲ十分世話スルカラ安心シテ元氣ニ働ケト激勵シテ下サツタノハ感激ノ外無カツタノデアル、殊ニ老岳父（北屯庄後庄子陳牛）ニ「家ハ軍用地ノ為移轉セネバナラスガ若シモ移轉先ガ未ダ定ラス中ニ移轉ヲ命ゼラレタラ妻子ヲ暫ク貴宅ニ収容シテ下サイマセ」ト頼ンダラ喜ンデ引受ケテ下サツタノハ何ヨリ有難イコトダ、老岳父ハ繰返シテ 注意シテ下サツタノハ任務ハ未ダ分ラスガ若シ通譯ヲ命ゼラレタラ戦地ノ事デスカラ軍民何レニ對シテモ間違ヒノナイ様ニ任務ヲ果セ、オ前ハ漢文モ分ルカラ言語デ不明ナ時ハ筆談デ通譯セヨ、一言違ハバ何レカノ命ニ係ハルコトダカラ輕卒ニスルナノ一事ハ何時モ頭ニ残ツテ居ツタノデアル。

二、營中生活

入營ノ最初營舎ニ床面ニ稻藁ヲ敷イテ古赤毛布ヲ蓆代用ニ、同ジ毛布ヲ一人一枚宛掛毛布トシテ設備サレテ居ルノヲ見テ或者ハ設備ノ粗末サニ驚イテ居ツタ、次ニ夕食ノ麦飯ニ味噌汁ノ一菜ニ又驚キ、入浴ニハ風呂場デナク營舎前廊下ノ下デ冷水浴ヲスルコトニ又吃驚シタノヲ聞クト可笑シク感ゼザルヲ得ナカツタ、何故ナレバ行先ハ戦地デハナイカ、戦地ニ於テ如斯寢室、寢床、食事ニ如斯新鮮ナ野菜魚肉、入浴スルニ如斯清水ガ果シテ得ラレルカドウカ知ラナイノニ營舎ノ生活ニ吃驚スルナラ戦地ニ行ツテドウナルカト思ハレルカラデアル、果シテ然リダ、輸送船ニ入ルト疊ニ敷物モナク二人ニ一疊ノ割当、冷水浴モ出來ナクナツタ。目的地ニ着クト偶ニハ廣東米ノ飯ガ出タリ乾味噌乾醬油デ料理シタオ菜ガ出タリスルマデハ良イトシテ入浴ドコロカ水缺乏ノ間ハ洗面ニ湯呑一杯位、食器洗ニ半杯ト云フ状態デ始メカラノ覺悟又ハ平素ノ鍛錬ガ足ラナケレバ到底辛棒シ難イダラウ、

洗濯、掃除總テガ自力デスカラ石鹼ヲ使ツタ割ニ垢ガ取レナカツタリ当番ニナツテモグズグズスル者ハ確カニ家デ樂ナ生活バカリシテ來タ者ニ相違ナイ、割合ニ有識階級ノ人達ガ集ツテ總ベテノ点ニ於テ一般ニ覺悟ガ良クテ勇氣ニ滿チ皆五百萬島民ノ代表者ノ氣持ハ十分察セラレルガ庭庭ニ於ケル整列、行進ノ訓練ニナルト中々揃ハナイノハ緊張味ノ不足カ平素ノ團體行進訓練ノ不足デアルト思フ

不寢番ガー夜ノ中ニ何回モ何回モ毛布ヲ掛ケテ下サツタノハ有難カツタ、自分が不寢番ニナツテ見ルト中々面白イ仕事ダツタ。夜ガ更ケテ少シ冷エテ來ルト彼處此處盛ニ咳嗽ガ出ル、本島人ハ一般ニ呼吸器ガ弱イト感ズル。入營中毎日午前午後ノ二回ニ面會ヲ許サレタノハ非常ニ有難カツタ、面會人ヲ通ジテ不足ノモノヲ買ツテ貰ツタリ面會ニ依ツテ家族、親戚、朋友ガ能ク營内生活ノ狀況ヲ知り得テ一層安心サセタリシテ皆大満足シテ感謝シテ居ツタ、

軍隊ノ規律、禮儀ノ正シイコトハ初入營ノ私等ニハ心掛ケテハ居ツタガ時々忘レルノヲ考ヘレバ平素ノ家庭生活ヤ社會生活ハ如何ニ不規則放慢デアルカガ分ルノデアル、苟モ

東亜ノ盟主トシテ大東亜建設ノ重任ヲ負フ日本國民トシテノ生活改善ハ外形ヨリモ内面ニ向ツテ力ヲ注グベキデハナイカ。

三、輸送途中

鉄道鉛線ニ居ル農夫、婦人、學生及埠頭岸壁ニ居ル市民、苦力、漁夫等ハ何レモ無一面識ダガ我等ノ從軍姿形ヲ見テハ萬歳ヲ連呼シ見送ツテ下サツタノハ何ト云フ有難イ事ダ、此ノ非常時最中ニ五百萬本島人ノ心ハ何處ヲ向ヒテ居ルカト疑フ人ガアルカモ知らヌガ此ノ事實ニ依ツテ其ノ疑ガ氷解スルデセウ。

南支那海ニ支那帆船ガ多数海面ノ單調ヲ点景シテ居ルノデ大陸ニ近イコトガ分ツタ、我ガ海軍ハ支那沿海ノ支那船交通遮断ヲシテ居ルノニ何故コンナニ支那船ガ多く出テ居ルノカト不思議ニ思ツタガ近寄ツテ見レバ皆漁船デ漁夫ハ一心ニ帆ヲ引キ乍ラ網ヲ扱ツテ居テ我ガ輸送船ニ対シテハ何等ノ表情モシナイ吞氣サダ、成程交通遮断モ斯様ナ平和ナ漁船ニ対シテハ何等用ガナイカラ支那漁民モ十分我ガ海軍ノ眞意ヲ了解シテ如斯吞氣ニ構ヘテ漁ヲシテ居ルダラウ、抗日將軍ハ何故此等ノ漁夫ニ日本ノ眞意ノ有ル所ヲ聞カナイカ。

某湾口ニ我ガ航空母艦ガ停泊シテ居ツタ、勿論海ノ荒鷺ノ巢ダ、其ノ巢ガシツカリ立ツテ居ルカラ海ノ荒鷺ハ自由自在ニ活動シテ敵ノ心胆ヲ寒カラシムルコトガ出來ルノダ、鉄ノ黒城一ツ黙然トシテ海ニ浮ンデ居ルガ空ニ向ツテ偉大ナ力ヲ發揮シテ居ルノダ湾内ニハ大小ノ我ガ軍艦ガ羅列シテ居ツタ、斯克アレバコソ海面ノ交通遮断モ陸軍ノ敵前上陸モ完全ニ遂行シ得ルノダ、大陸ヲ席卷スル前ニ制海權ヲ確保スルノハ何ヨリ必要ダ、世界軍備縮少否海軍縮少會議ヲ開イテ我ガ日本ノ海軍ヲ制限シ又ハ制限セムトシタ英米ノ奔走ハ無理モナカツタ、我ガ日本ガ世界會議ヲ招集シテ英米ノ海軍ヲ縮少シテヤツテハ如何デセウカ。

有名ナ虎門要塞ノ防禦工事ハ上ツテ見ヌカラ分ラヌガ見エル所ヲ眺メタ丈デモ其ノ堅固サガ察セラレル、單ニ陸軍ヤ海軍丈デ此ノ大虎小虎ノ穴ニ隠レテ居ル虎ノ子ヲ取ルニハ容易ナコトデアアルマイガ荒鷺ガ空カラ來タラ大虎小虎ハ勿論老虎ノ虎牙、虎爪ハ皆傷ンデシマツテ虎骸丈古蹟ノニ残留シ其ノ上ニ日章旗ガ輝イテ居ノハ特ニ光強ク見エタ。珠江ヲ溯江スレバ兩側ノ所々ニ小サイ白旗ガ江中ニ立ツテアツタ、旗ト旗ノ間即チ江ノ中央ダケハ掃海済テ安全航行ガ出來ル目印ダサウダ、安全線外ニ珠江封鎖ニ使用サレタ船体ヤ其ノ他ノ障碍物ガ波ニ打タレツ、沈ンデ居ルノガチヨイチヨイ見エタ、封鎖工事ノ骨折モ一通リヂヤナカツタラウガ夫レヲ取除ク掃海作業ノ御苦労モ十分察セラレルノデアル。

我々ガ乗ツタ輸送船ノ外ニ貨物輸送ヲシテ居ル大小ノ發動船ハ百以上モ行列シテ勇シイ爆音ト江面ヲ蔽フ日ノ丸ノ旗ハ迎モ賑ヤカダツタ、支那船殆ンド一隻モナイト云ツテ良イ程珍シカツタ、水路交通ノ便利ナ廣東ノ總出入水路タル珠江ニハ事変前ニハ大小數十萬隻ノ船ガ通ツテ居ツタサウダガ今日章旗以外ノ船ガ殆ンド見エナイノハ日章旗ノ偉力ニ感激スルト共ニ事変前ノ江面ノ賑ヤカサが見ラレヌノハ惜シカツタ、戰敗國ノ悲惨

サヲ痛感セザルヲ得ナイノダ、抗日將軍ハ以テ如何トセムヤダ。

四、任地ニ着テ

廣東市対岸河南ニ相当大キナ倉庫ガ並ンデ居ル、石油タンクモアル、ガソリタンクモアル、大キナ所ニハ皆英又ハ米ノ国旗ヲ立テタリ屋根ヤ壁ニ書イタリシテ居ル、旗色ノペンキハ尚ホ新シク見エル、抗日軍需品ヲ納メテ居ルヂヤナイカ、何トカ手ノ附ケ様ガ無イデセウカ、恨メシイ所ダ。

市内ノ大建築物ハ百貨店ヲ始メ六階八階ノモノモ相当ニアリ商店ノ建方ハ中北支ト違ヒ台湾ヤ香港ノ様ニ皆亭仔脚ガアル、熱帯圏ニ入ツテ居ルカラデセウ、街路ハ全部アスファルト舗装デ建物モ揃ツテ居ル、人口百万以上支那第二、南支第一ノ大都市丈アツテヨク整頓シテ居ルト感心シタ。

亭仔脚ノ所々ニ市民防空室ヲ設備シ、大建築物ノ上ニハ編竹ヲ以テ五重十重ト高く架設シ省政府市政府ノ廳舎ニハ完全ナ地下防空室ガアリ市ノ附近ノ崗ニハ市民防空壕ガ多数ニ設ケラレテ防空施設トシテハ遺憾ナキ程完備シテ居ルト感心シタ、然シ我が空軍ガ廣東ヲ偵察又ハ爆撃ヲシテ以來一度モ支那空軍ガ抵抗ニ來タコトガ無カツタサウデ何時モ我が空軍ノ為スガ儘ニ任セテ居タノデアル、防空設備ハ或程度迄ハ勿論大ニ必要ダガ最モ完全有効ナ防空ハ矢張り空軍ヲ以テ空中防禦ヲスルニ限ルト痛感シタ。

廣東市ノ二三ノ通りハ爆撃又ハ焼却デ全ク廢墟ニ等シイガ其ノ他ハ殆ンド元ノ儘デ只市民ガ居ラス死ノ街ニナツテ居ルノダ、能ク逃ゲタモノダト吃驚シタ、

途中デ我が警備隊ニ逮捕サレテ待決シテ居ツタ便衣隊ノ様ナ者ヲ見受ケタガ何レモ苦シミヲ辛棒シテ悲観ノ顔モ見セズ、未練ノ救ヒモ求メズ、女々シイ泣哭モセズロヲ緘ジテ物ヲ云ハナイデ如何ニモ殺スナラ早く殺セト云ハムバカリノ態度デシタ、抗日精神ヲ十分注入サレタ抗日分子デハナイカト思フ、流石ハ抗日ノ策源地ダ。之ニ反シテ人影ガ殆ンドナイ亭仔脚ニ憔悴ナ顔ヲシテ居ル連中ハテールヲ圍ツテ賭博ヲ面白サウニヤツテ居タノヲ三四ケ所見受ケテ其ノ賭博根性ノ強イコトニハ呆レタ。

店舗ヤ住宅ノ門扉ヤ窓ニハ揃ヒモ揃ツテ「此屋被劫一空」トカ「此屋被劫三次」ノ貼張ガアル、即チ「此ノ家ハ品物ハ全部掠奪サレテ一物モナシ」トカ「此ノ家ハ三度掠奪サレタ」ノ意味ダ、土匪ガ掠奪ヲシテカラ丁寧ニ之レヲ貼付ケル筈ガナイシ、掠奪サレテカラ主人ガ何苦ンデ夫レヲ廣告スル必要ガアラウカ、我々ニハ中々分ラヌ、聞ク所ニ依レバ戦乱ニ慣レタ支那人ハ自己ノ家財道具ノ保全ニ萬策ヲ盡シテ居ルノデコンナ貼紙モ其ノ一策ダサウダ、即チ家財道具ハ逃難留守中ニ掠奪サレル心配ガアルカラソノ貼紙デ先手ヲ打ツテ勝利シテ入城シタ軍隊ヤ土匪ニ失望サセテ災難ヲ免レヤウトスル為ダサウダ、果シテ然リトセバ可憐ナコトデハナイカ。

五、戦地生活

戦地ニハ物資ガ缺乏スルコトガアルカラ贅澤ヲ云ハズニ今カラ覺悟セヨト在當中時々教ヘラレタシ、應召ノ時カラ既ニ其ノ心算ダツタカラ戦地生活ニ入ツタカラト云ツテ別ニ吃驚スル程ノ苦シイ思ヒハ起ラナカツタガ敷物、掛物ナシニ寝タコト（十日間）ヤ稲藁

ヲ敷イタ丈ノ寢床（二三日間）ヤ野山ノ露營（二夜）ナドハ始メテダ、宿营地ナラ安心シテグウグウ眠レルガ日暮マデ戰ツテソノ場テ露營シタリ敵ノ宿營ニ近ヅイテ露營シタリシタ二晩ハ武器一ツ持タナイ自分ハ歩哨ニナレナイガ一晩中四方ノ様子ヲ眺メ乍ラ見張番ノ一員ニナツタ積リダツタ。

一ヶ月振りニ風呂ニ入り、三十五日目ニ下着ノ洗濯ヲシタ時ノ良イ氣持ハ何トモ云ヘナカッタ、着物が湿レテモズボン、キヤハンガ湿レテモ其ノ儘寢起シテ風引モセネバ何ノ病氣モ起ラヌノハ精神ノ緊張ニ因ルデセウ、精神一到何事不成ヲ實驗シタ譯ダ。

宿营地ニ到ルト或ハ鍋、或ハ食器、水甕等ヲ搜出シ或ハ灶ヲ作り或ハ場所ノ清掃、或ハ便所ヲ作り或ハ反物、蓆等ヲ集メテ間仕切ヲスル等上手ニ物ヲ利用シテ忽チノ間ニ宿營ガ出來ルノハ感心ニ堪ヘナイ、豚ヲ殺スニハ劔ヲ喉ヲ突イテ逆様ニ吊上ゲテ血ヲ出シテカラ小刀一挺アレバ皮モ剥ギ肉モ取ルノハ感服ノ外ハナニ隊長殿ヲ始メ下士官、兵員ニ至ルマデ皆親切ニシテ下サツタノハ一生忘レラレナイ感激ダ、下士官ノ事務ハ中々多忙ヲ極メテ居ル、毎晩夜半過マデダ、モット人員ヲ増シテヤル譯ハイケナイカネ。

郵便物ヲ貰ツタ時ノ嬉シサハ何トモ云ヘナカッタ、家信ヲ見タ時ハ又格別ダ、一枚ノ葉書、一箇ノ粗末ナ小包デモドレ程精神ヲ慰メ得タカ知ラス、出征軍人ノ慰問ハ必ラズシモ貴重ナモノハ入ラナイ、永イ美文ヲ要シナイ、人数多ク回数多クドシシ慰問品ヤ故国ノ消息ヲ出セバ結構ダ、此レハ戰地ニ於ケル唯一ノ樂デアルカラダ。

六、通譯勤務

徵發ノ際理解ノアル人ナラ進ンデ物資ヲ提供シ下サツテ事ハ早く進ム、氣持ハ迎モ良イカラ安價デ宜シイト云ハレテモ餘リ安クハ拂ヘナイガ狡猾ナ人ニナルト口丈ハ上手ニ迎合シテ有物デモ無イト云ツテ出サナイデ強制徵發ヲサレテカラ高價ニ要求スルノハ高ク拂ヒ度クテモ拂ヘナクナル。

宿营地ノ歩哨線附近ニ日暮又ハ暗夜ニナツテカラ村ノ復歸者ハ恐れ恐レ稲刈ニ來ルト歩哨兵ハ直チニ神經ヲ尖ラシテ捕ヘテ來ル、種々取調ノ結果避難シテ饑餓ニ堪ヘズ食物ヲ求メル為ニ稲刈ニ戻ツタ農民ダガ日中ニ出ルト日本兵ニ殺サレル恐レガアルカラ態々夜ニナツテカラ出タノダト判明シテ両方共何々大笑シタコトガ幾度モアツタ、夫レ等ノ農民ニ我ガ軍ノ眞意ヲ説明シテ聞セタ上宣傳ビラヲ渡シテ良民ノ復歸方勸誘ヲ頼ンダラ日増ニ多ク復歸シテ晝間ニ形ノ悪イ遽カ造リノ紙日章旗ヲ手ニ持チ田ニ立テ、盛ニ稲刈スルノヲ見ルト愉快ダツタ。

避難民ノ復歸者ニ軍ノ残飯ヲ恵與シテ宣撫ノ一工作トスルノハ名案ダ、残飯配給ニ一定ノ順序ニ依ラス為何時モ先ヲ争ツテ大混雜デシタ、老人、子供ヲ押シ倒シテ平氣ニ先ヲ争フノハ利己主義ノ良イ標本ダ、イクラ整理シテモ聽カズ銃劔ヲ突出シテモ恐レズニ押寄セテ來ルカラ村ノ奉仕團職員ヲ煩ハシテ説明シテ聽カセルト柔順ニ整理シテ樂ニ配給シ得タ、我利々々ノ貧民モ人情義理ヲ知ツテ居ルノダ、言語ハ銃劔以上ノ利器トナル場合モアル、益々自分ノ言語不通ヲ怨ム、

或部落ノ狀況調査ニ行ツタ際ハトボツボ歌フ子供ノ声ガ聞エタ、兵隊ト一シヨニ丸太

運搬ヲシテ居ル村ノ子供等ハ兵隊サンノ音頭取りニ從ツテ面白サウニ歌ツテ嬉シサウニ働イテ居ルノダ、ソレヲ聞イタ私等モ思ハズニコニコシタ、日語教授ヤ日支親善工作中日本ノ歌モ大切ナ一役デアルコトヲ忘レテハナラスノダ。

警備地域外へ出テ宣撫工作ヲスルノニ兵隊サントーシヨニ出ナイト危険ダガーシヨニ行クト田畑デ働イテ居タ農民ハ懼クテ逃ゲタリ隠レタリスル、ソレヲ追跡シテ宣撫スルト胸ヲ撫下シテ溜息シテ喜色満面安心シタノヲ見ルト通譯ノ力モ大ナル哉ト自惚レル、時ニハ氣ノ早イ兵隊サンハ彼等ノ逃ゲ振り隠レ振りヲ見テアレハ必ラズ便衣隊カ土民兵カ敗残兵ダト早合点シテ発砲スルト彼等ハ益々懼クテ懸命ニ逃ゲル、*****
*****サウカト云ツテ時ニハ我が歩哨ガ敵ノ便衣隊ニ襲撃サレタコトモアルカラ中々油断ハ出來ナイ、斯ウナルト警備モ宣撫モ簡單ニ行ケナクナツタ、ソレデ通譯任務ノ重大性ヲ益々痛感シテ客語（台湾ノ廣東語）ノ分ル人が居ル時ハ通ジナイ人ニ対シテ二重通譯ヲシタリ筆談デヤツタリシテ萬遺憾ナキ事ヲ期シタ、幸ニ廣東農民ノ大部分ハ漢文ヲ識ツテ居ルカラ辛ジテ任務ヲ果シ得タノハ一安心デシタ。

七、見タ地方ノ産業

見ナイ地方ハ分ラヌンカラ見タ地方丈述ベヤウ、廣東ノ東北一帶ハ粘土質ガ多イガ甘藷ハヨク出來ル、新式製糖工場モアル、制糖業有望ダ、米モ出來ルガ西貢米ニ近い貧弱ナ品種ダ、施肥モ少量ノ自家肥料ダ、米種ヲ改良シテ肥培スレバ米産ノ前途ハ洋々タルモノダ、バナナモ有名ダガ米同様ニ感ズル、名果荔枝ハ廣ク栽培サレテ居ル、パインモ出來ル、罐詰業ヲ盛ン起セバー層有利ニナリ盛ンニナルダラウ、キヤツサバハ早くカラアルト見エテ集團栽培ハ見エナイガ自家用トシテ甘藷ニ混植シタノハ少ナクナイ、甘藷モ概シテ旨イ、澱粉工業モ有望ダ、造林ハ政府ノ獎勵デ限ナク松ガ植エラレテアル、想思樹ノ造林ハ寧ろ有望デヤナカラウカ、

然シ農民ハ概シテ貧困ノ様ダ、大概ナ大部落ニ大質屋ガ立派ニ建ツテ居ルノヲ見テモ分ル、質屋ノ利率ハ月三分デ年三割六分ダ、金利ハ高イ、富農ト高利貸ノ横行ニ任セテ居ルノハ氣ノ毒千萬ダ、産業改良ガ行ハレナイノモ道理ダ、合作社（産業組合）ノ建設運動モ相当ニ省政府ガ盡力シテ居ルガ銀行カラ借金高ヲ先決セネバ設立シナイ又ハ設立シ得ナイト來テハ前途遼遠ダ。

八、實戰參加

或日ノ晝食後突然出動命令ガ出タ、通譯モーシヨニ行クトノ事デ準備シテ出動シタ、宿营地カラ十里位ノ山奥ヘトラツクテ行ツタ、下車シテ暫ク前進スルト右側ノ水田ニ散兵シテ右方ノ小山ニ居ル敵ニ向ツテ前進シタ、敵ハチエツコ機関銃ヲ射出シテ來タ、ソレヲ物トモセズニドンドン前進シタ、止レ、射テ、ノ命令デ田圃ニ伏シテ攻撃シ始メタ、敵味方共機関銃デ我が軍ニハ又山砲一門右後方カラ射ツテ居ルノデ山ニ響ク砲声、機関銃声ハ迎モ壯烈ダツタ、スル体験ハ始メテダ、銃彈ガビユウビユウ飛ンデ來タ、ソレハ高く飛ブヤツダカラ心配入ラナイト教ヘラレタ、射ツテハ進ミ、進ンデハ又射ツタ、敵ノ

射出モ漸次激シクナツテ中々逃ゲナイ、パチンパチンノ音モアル、近イ所カラ射ツテ來彈ダト聞カサレタ、次ニチユツチユツノ音ガシタ、地ニ落ち [タ] 彈ダト教ヘラレテ何處ニ落ちタカラ見タカツタガ一向見エナイ、二百米位敵前マデ進ンデ兪々戰ハ酣ニナツタ、敵兵ノ姿形ヲ頻リニ見ヤウトシタガ一向見エナカツタ、激戰約一時間デ左右方ノ高地ヲ占領シタカラ敵ハ後退シテ終ツタ、奥ヘ奥ヘト進撃シテ或田圃ヲ隔テ、又一時間バカリ激戰シテ日ガ暮レタカラ双方休戰シタ、

夜ニ入ツテ下山シテ他方ノ敵ノ大部隊宿营地ヲ夜襲スベク約四時間道ナキ所ヲ行軍シタ、夜半頃目的地ニ着イテ一戰シテ饅頭山ヲ占領シタ、翌日更ニ敵ノ大部隊ニ遭遇シテ激戰六時間ノ後之レヲ撃退シタ、其ノ後夜襲ニ出タコト二三回アツタ、實ニ一生忘レラレヌ貴重ナ體驗デシタ、實戰ニ當リ部隊長殿ノ勇敢デ機敏ナ指揮振りヤ全軍ノ勇猛ト協力ニ感激シタ、又我が軍人ノ体力ト忍耐力ガ強イ上ニイザト云フ時ニ皆一死報國ノ強イ精神ヲ有ツテ居ルカラ鬼ニ金棒ダ、日本軍ノ強イ点ハ勿論多方面ニアラウガ此等ハソノ重要ナ部分ヲ占メテ居ルデハナイカト思フ。

進軍中又ハ激戰中ニ友軍ノ飛行機ガ來タ時ハ何ヨリノ嬉シイコトダ、敵ハ我が飛行機ヲ恐レルノモ無理ハナイ、爆撃ノ跡ヲ見ルト家屋ハ倒壞シ橋梁ハ落ち道路ハ切断サレルカラ大軍ノ集結又ハ進軍ハ全ク出來ナイカラ游撃戰ト云フ美名ヲ附ケテコソコソ出テハ逃ゲ逃ゲテハ出ル戰法ヲ採ツタデセウ

空軍ノ偉力ハ制空ト共ニ制地モスルノデ飛行機ハ現代兵器ノ王ト稱シ得ルダラウ。

九、銃後國民ノ覺悟

侍從武官御査閲ノ際我等軍属マデ 恩賜ノ煙草ヲ賜ハリマシテ家族親戚ト共ニ聖恩ノ高キニ感激シ何時モ

聖恩ノ萬一二報ヒ奉ル心掛ヲシテ居ルベキダ

戰敗國ノ悲惨サヲ見レバ誰デモピント頭ニ響クノハ「戰爭ハ勝ツニ限ル」ト云フ一念ダ、而シテ其ノ目的ヲ達スルニ強イ軍人ノ外ニ外交ノ調整、内政ノ整備モ必要デ所謂國家ノ總力ヲ強化シナケレバ困難ナ事ダ、ソレデ銃後ノ國民トシテハ常ニ戰地ニ於ケル將兵ノ勞苦ヲ考ヘテ保健ニ留意シ精神ヲ訓練シ生産擴充ヲ圖リ消費節約ヲ實行シ物資ヲ愛護シテ出征軍人ノ慰問、軍事後援ノ強化等ハ寸時モ忘レテハナランノニ贅澤三昧ヲシテ平氣デ居ル無自覺者ヤ時局ヲ悪用シテ暴利ヲ貪ツタリ詐欺強盜ヲ働イタリスル不徳漢ガ居ルナラ認識不足モ甚シイノデ實ニ憤慨ニ堪ヘナイ次第デアル。

以上

後軍感想記録

南支派遺蹟本(三定)都防古賀部隊相考、
陸軍臨時通譯 廣徳 穂

一 百集ヲ受ケテ。
覺悟ノ前ニ心配ナレ 我が帝國ガ支那大陸ニ出兵シテ
東亞永遠ノ平和ヲ確立スル為メニ戦ヲ繼續スルコト一年有
半ニ近キ昭和十三年十月十九日午三時頃ハ中華内ニ於テ
終止云云ニ 助役橋ニ過ソテ助役橋ハ焦燥ノ面持テ曰ク
「君ヲ大ニ捜シタガキニ分ラナイデ困ッタデスコト」何カ急
用デスカトト衣向シタウ助役「二丁座中ニハツテ話シタ
ト答(ラレド)デバア百集ハメデスカト笑ツテ問ウタウ

西文風印

「テ入り」ト為シテ「奥」ハツテ赤い紙ヲ書
徴登若知書ヲ示セシ、
後事ヲ頼ムソト笑ワテ若知書ヲ後取テ別シ、
突然召集ヲ受ケテ吃驚モシテ「カカ、ハ前以テ慢性
テ居ッタカラツアル。只心三活シテハ折角應召シテ何
傷キガ出来ヤウカノ事、ミカ、軍事訓練ヲ受ケテ居ラヌ
カラ勿論兵ノ一員トシテハ傷ケナイ、永年勞働シテ居
カラ軍火トレモ行ケヌニ、通譯トシテハ中北支ナラ
北京法ハ未熟カシ、南支ナラ台語、廣東語(客語)
通ズル汕頭地方ハ未ダ占領シテ居ナイノデ廣東語(廣州
語)ヲ使用スル地方ハ行ケル相當困難スルカ、然シ

多大漢文ヲ心得テ居ルカラ萬一、總舎ハ筆談ヲ行ケ
ルカラ、如斯種々想像シテ見ルト本島人ニ生シタ利ハ
今年四十八歳ノ半老軀ヲ以テ南支戰地ニ出テ皇軍ノ
一員ニ加ハツテ盡忠報國スルコトが出来ルハ先榮ノ至リ
カト歡喜感激シテ勇躍セザルヲ得ナカツタ。
家ノ屏ヲテ見ルト妻ハ忙カモ留守ガツタ、後顧ノ憂ヲ
無スル為資産負債ニ關スル書類整理中妻ガ返テ
来テ構ノ叔父カヲ招キ聴カセルト盡誠ノ仕度ヲシ
テ「總舎ノ通りカスネ、在ルハヤ、ノ元氣カスカラ結
構ナトテ又曰、若モ良人ノ留守ニハ慣レテ居ルカラ別
ニ何も心配スルコトハアリマセン」ト云ツテ用事ルテモ無

夕ハ夫張リ平素ノ覺悟ニ外ナラヌト思フ。
 親戚朋友ハ何レモ軍夫ナラキカラク、通譯ナラ申分
 無カラトト云ツテ私ノ元氣ニ動カセテ皆憂色満面デ
 家族ノ十分世話ミルカラ安心シテ元氣ニ勵ケト激勵シ
 テ下サツタハ感激ノ外無クツタアル殊ニ老岳父(北佐之
 後庄子 陳牛)ニ「家ハ軍田地ノ為移轉セハナラヌカ
 仁モ移轉セカ未ク先ニ又中ニ移轉ヲ命セラシタラヌ
 子ヲ勤ク貴宅ニ収養シテ下サツタハ頼コシタラヌ事
 ンデ引受テ下サツタハ何ヲ有難イ下タ、老岳父ハ
 縛馬ニシテ注意シテ下サツタハ任務ハ未ク分ラヌカ
 シニ通譯ヲ命セラシタラ戰地ノ事ヲスカラ軍民何レニ

討シテモ向遠ヒノナイ橋ニ任務ヲ果セオ前ハ漢文モ合ル
 カフ言語デ不明ナ時ハ筆談ヲ通譯セヨ一言違ハハ
 何レノ命ニ係ラルト外カラ輕卒ニスルノ一事ハ何時モ
 頭ニ鍊テテモツタノデアル。
 二 營中生活
 入營ノ最初宿舎ニ床面ニ褥葉ヲ敷イテ五赤毛布ヲ蓆
 代用ニ同じ毛布ヲ一人一枚宛掛毛布トシテ設備セテ帳内ノ
 見テ或者ハ設備ノ粗末ヲ覺イテ垢ツタ、次ニ夕食ノ麦
 飯ニ味噌汁ノ一菜ニ又醬キ、入浴ニ風呂場ヲナク、營舎
 前廊下ノ下ヲ冷水浴ヲスルトニ又吃醬シタラテ餌ケト
 可笑シク感ゼルヲ得ナカッタ、何故ナルハ行先ノ戰地ニ

ナイカ、戰地ニ於テ処斯宿舎寢床倉庫ニ如斯形
 ナ野菜鼻團、入浴ニ如斯清水カ果シテ得ラレカド
 ウカ知ラナイノニ營舎ノ生活ニ吃醬シテラ戦地ニ行
 テドウナルカト思ハレルカラデアル、果シテ然リカ、輸送船
 ニ入ルト豈ニ敷物モ掛物モナク二人ニ一畳ノ割吉、冷水洗
 毛布ナクナツタ、目的地ニ着ルト偶ハ唐東米ノ飯カ出リ
 乾味油乾醬油ヲ料理シテ菜カ出リスルマテハ良イトテ
 入浴トコロカ水鉋乏ノ向ハ洗面ニ湯器一杯、倉舎洗ニ杯
 トニツケテ始メカラノ湯、倍又ハ平素ノ鍛鍊カ足ラ
 ナケレバ到底辛捧シ難イタラヌ、
 洗濯、掃除總テカ自力ヲスカラ名辭ノ便ツタ割ニ垢カ

取レナクナリ古番ニナツテモケツ、スル古番ハ確カニ窮デ
 營中生活ハカリシテ未ク古番ニ相違ナイ、割舎ニ有識者
 般ノ人達カ佐布ツテ總ベテト突ニ於テ一般ノ覺悟カ良
 クテ厚氣満チ皆五百萬島民ノ代表者ノ氣持十分
 露セラレカ當座ニ於ケル整列、行進、訓練ニ於テ
 中々稱ハナイハ、醫藥時ノ不足ク平素ノ團体行進訓
 練ノ不足デアルト思フ
 不寝番カ一夜ノ中何回モ、毛布ヲ掛ケテ下サツタハ
 有難カク、自分カ不寝番ニナレ見ルト巾着面白ク仕
 事カウタ、夜カ更テ下サツタ冷エテ見ルト彼處此處
 蟲ニ咬カ出ル女信人一般ニ呼吸器カ弱イト感ズ

入堂中毎日午前午後二回ニ面會ヲ許サレタリハ非常ニ有難ク又面會人ヲ逼リテ不足ノモノヲ買ツテ世貴ツタリ面會ニ依リテ家祿親戚朋友が能ク堂内生活ノ狀改テ知り得テ一層安心サセリレテ皆大満足ニテ感謝シテ居ル也、
 軍隊ノ規律禮儀ノ正レイトハ初入堂ノ初等ニハ心掛ケテハ長ツタが時々忘レルヲ去ルシハ平素ノ家庭生活ヤ社会生活ハ如何ニ規則放慢ナリカか分ルゲル共同モ東亞ノ盟主トシテ大東亞飛没ノ重任ヲ負フ日本國民トシテ生活改善ハ外形ヨリモ内面ニ向ッテ力ヲ注グベキナルハナクイカ。

三 輸送途中

鐵道船綿ニ長ル農夫婦人學生及埠頭岸壁ニ長ル市民苦力渡夫等ハ何レモ無一面識分カ我等ノ從軍姿形ヲ見テハ落度ヲ連呼シ見送リテ下サツタハ何ト云フ有難イ事歟此非常時最中ニ五百落東京身人ノ心ハ何處ヲ向ヒテ居ルカト疑フ人がアルモ知ラ又此ノ事實ニ依リテ其ノ疑カ氷解スルコトセウ、
 南支那海ニ支那帆船が多数海面ノ單洞ヲ莫ク集メテ居ルノテ大陸ニ近イコトが分ル我カ海軍ハ支那沿海ノ支那船交通遮斷ヲシテ居ルノ何故ニ十三支那船が多ク遊于居ルノカト不思議ニ思フタ近寄リテ見

ルハ皆漢船ヲ漢夫ハ一心ニ帆ヲ引キテ網ヲ扱ツテ長テ我カ輸送船ニ對シテ何等ノ表情モシナイモ氣分ハ敵艦交通遮斷モ斯様十平利ノ漢船ニ對シテ何等用カナイカラ支那漢民モ十カ我カ海軍ノ真意ヲ了解シテ此斯等氣分構ヘテ漢ヲシテ居ルカラウ抗目將軍ハ何故此等ノ漢夫ノ日中ノ真意ノ有ルヲ測ルナク甘苦灣ニ我カ航空母艦が停泊シテ居ルカ勿論海ノ荒鷲ノ輩其ノ巢ヲシカリシツテ居ルカラ海ノ荒鷲ハ自由自在ニ流布シテ敵ノ心胆ヲ寒カラシムトカ出来ルノカ鉄ノ軍艦一ツ黙然トシテ海ノ浮レテ居ルカ空ニ向ツテ偉大ナ力ヲ發揮シテ居ルノカ

湾内ニ大小ノ我カ軍艦が羅列シテ居ルカ斯クテ心コソ海面ノ交通遮斷モ陸軍ノ敵前上陸モ完全ニ遂行シ得ルノカ大陸ヲ席卷スル前ニ制海權ヲ確保スルノ何ゾリ必要カ世界軍備縮小ニ海軍縮小會議ヲ開イテ我が日本ノ海軍ヲ制限シ又ハ制限セムトシタ菜米ノ奔走ハ無理モナク我カ日本カ世界海軍ヲ招き市ニテ菜米ノ海軍ヲ縮小シテヤツハ如何トセウカ、
 有名ナ虎門要塞ノ防衛工事ハ上ツテ見エカラ分ラ又カ貝瓦片前ヲ眺メタ又カモ其ノ堅固ヲ察セシル四軍ニ陸軍ヤ海軍ヲ此ノ大虎小虎ノ穴ニ隣レテ居ル虎ノ子ヲ取ルニハ容易ナ事ナハアルマイカ荒鷲が空カラ

末より大虎小虎ハ勿論老虎ノ虎牙、虎爪ハ皆備シテ
シツテ虎骸丈古蹟的ニ残留シ其ノ上ニ日章旗カ
揮イテ長ハ特ニ光輝ク見エヌ。

珠江ヲ湘江ニシテ兩側ノ間ニ小サイ白旗カ江中ニ立ツ
テ萬々旗ト旗ノ間即チ江ノ中央外ニ掃海掃テ
安全航行カ出来ル印外ガ外ガ安全係外ニ珠江封鎖ニ
便南セテ船隻ヤ其他ノ障礙物カ波ニ打タレツ封鎖ニ
長ルカ右イノ見エヌ、封鎖ニ事ノ骨折モ一途ニテ
ルヤナカッタラカ夫レヲ取除ク掃海作事ノ苦勞必
十ノ九窮セラレルカヤル

發動艦百以上モ行列シテ勇勇シク艦首ト江面ヲ蔽フ日、
丸旗ハ連七艦ヤムツタ、支那艦船ニド在モサトムツテ
良イ程ヲシカツタ、水路文區ノ便利ナ廣東ノ船カ
水路タル珠江ニハ事ノ夏前ニハ大小數十隻復ノ船カ
通過ツテ長クサウカ合ハ日章旗以外ノ船カ死ニ見
エナノハ日章旗ノ偉力ニ感激スルト苦ニ事ノ夏前ノ江
面ノ賑ヤオサカ見ラシ又ハ八幡シカツタ、戰敗國ノ悲慘ナ
ラ痛感セザルヲ得ナイカ、抗日將軍ハ以テ如何トセザヤ。
四、任地ニ着テ

廣東市對岸河南ニ相若大キナ倉庫カ並ニカ兵ル
石油タンクモアルカソリニタリモアル、大キナ所ハ皆英

又ハ米ノ國旗ヲ立テタリ屋根ヤ壁ニ書イタリシテ塔
旗色ノ下ニキハ尚ホ残シテ見エ、抗日軍帶傷ヲ癒メテ
二居ルヤナイカ、何トカ手ノ附ケ揚カ無イカセラケ恨メテ
シカ。

市内ノ大建築部ハ百貨店ヲ始メ六階八階階ノモノモ
相當ニアリ商店ノ建方ハ中北支ト違ヒ、台灣ヤ香港
ノ様ニ皆亭仔脚カアル、熱帯國内ニ入ツテ兵ルカ活動カ
街路ハ全部一ツアアル舗裝ヲ建務モ揃ツテ兵ル、
人ハ百万以上支那オ二南支東一大都市又アツテヨリ
整頓シテ兵ルト感心シタ。

上ニ編竹ヲ以テ重量ト重ク架設シ水自政府ノ政府ノ
腐敗ニ定全十世下防空室カアリ、市ノ附近ノ崗上ハ市民
防空壕カ多數ニ設ケレテ防空施設トレテハ遺憾ナキ
程整備シテ兵ルト感心シタ、然レ我カ此ノ軍カ廣東ヲ
侵奪ス又ハ煽撃ヲシテ以來一度モ支那空軍カ抵抗ニ
果タズカ無カ、タツテ何時モ我カ空軍ノ為スル儘ニ位
セテ兵ルトシテハ防空設備ハ或程度迄ハ勿論大ニ必
要カ最モ完全有効ナ防空ハ矢張り空軍ヲ以テ
宜ニ中防禦ヲスルニ限ルト痛感シタ。

廣東市ノ二三通りハ煽撃ノ又ハ燒却ガ全ク廢墟ニ
等シイカ、其ノ他ハ殆んど一ニ儘カハ市民カ居ラヌ死

ノ街ニナツテ厄ルガ、能ク逃ケタモクド吃驚シタ
 窪中ノ物ガ警備隊ニ逮捕セリテ待伏シテ厄ツタ便衣
 隊ノ様ナ者ヲ見受ケタガ何レモ甚シク辛棒シテ
 悲観ノ顔モ見セズ、毛練ノ故モ取メズ、女ミシイ泣果モ
 セス口ヲ緘シテ物ヲ云ハナイテ、如何ニモ殺スナラヨク
 殺セト云ハルカリノ能ク度デシタ、抗日精神ヲ十分注
 入セテ抗日分子ナリナリカト思フ流石ハ抗日策源地外
 之ニ及シテ人影ガ殆ドナイ唐脚ニ憔悴ナ顔ナシテ
 厄ル連中ハテコルヲ圍フテ賭博ヲ面白サマニヤツテ母
 ノヲ三四テ見受シテ其ノ賭博根柢ノ強イコトニハ
 呆レタ。

虎鋪ヤ住宅ノ門ニ扉ヤ窓ニ拵ヒモ拵ツテ「此屋被劫」空
 トカ「此屋被劫三次」ノ貼張ガアル事ナリ「此ノ家、器物ハ
 全部掠奪サレテ一掃モナレ」トカ「此ノ家ハ三度掠奪セタレ
 ノ意味ガ、土匪ガ掠奪ヲシテカラ丁寧ニ之レヲ貼付ケル
 俗言ガナイレ、掠奪サレテカラ主人ガ何苦シカ夫レヲ廢業
 スル必要ガアラウカ、我々ハ中々分ラヌ、爾ク所ニ依ルハ戰
 乱ニ慣シタ支那人ハ自己ノ家財道具ヲ、信全ニ萬策ヲ
 盡シテ厄ルノヲコト賊紙モ其ノ策外サウガ、再々家財
 道具ハ、逃避留守中ニ掠奪サレル心配ガアルカラソノ
 賊紙ガ先手ヲ打ツテ勝利シテ入城シタ軍隊ヤ土匪
 失望サセテ災難ヲ免レヤウトルガ外ナラヌ、事ニテ然

リトセハ可憐ナ事ナリナイカ。
 五、戰地生活
 戰地ニ物資ガ缺乏スルコトガアルカラ警備隊ヲ云ハシムカラ
 腹饑セヨト在營中時々、敵ニシタシ、應召ノ時カラ敵
 ニ軍心ガ早クツタカラ戰地生活ニ入ツタカラト云フア別ニ
 吃驚スル程ノ苦シイ思ヒ起ラナカクガ敵物、樹木ナシ
 ニ腹タコト(十日間)ヤ榴莖ヲ敷イタ又ハ廢床(三日間)
 ヤ野山ノ露營(二夜)トト始メテ、宿營地ナラヌ
 ハシテガカ、眠レルガ日暮マテ戰ツテソノ場ニ露營
 シタリ、敵、宿營ニ近ツイテ露營シタリ、二腹ハ
 武器一ツ持タナイ自分ハ歩哨ニナレシガ一腹中四方

ノ様子ヲ眺メテ作ラ見張番ノ一員ニ夕方積リ外ガ
 日月振リニ尿器ノ入り、三日目ト下着、此以濯ラシタ時
 ノ夜イ氣持ハ何トモ云ヘナカク、着替ガ濡シテモ
 ノボン、キヤンガ濕シテモ其ノ儘寝起シテ風引モセズハ
 何ノ病氣モ起ラヌハ精神ノ緊張ニ因ルセウ精神
 一到何事ニ成ラズ強シタ譯分。
 宿營地ニ到ルト或ハ鋸或ハ倉倉水履等ヲ搜出シ
 或ハ灶ヲ作り或ハ湯火ノ具清掃、或ハ便所ヲ作り或
 ハ衣箱、草蓆等ヲ集メテ前仕切ヲスル等、上至ニ物ヲ
 利用シテ忽チ、向ニ宿營ガ出来るハ威心ニ堪ナイ、
 敵ヲ殺スニハ劍ヲ突イテ逆持ニ吊上げテ血ヲ出

シテカラハ刀一握アハ皮モ斜ガ肉モ取ルハ感服ノ外ナ
 隊長殿ヲ始メ下士官ノ兵勇ニ至ルテ皆親切ニシテ下サ
 ハ一坐志シテハノ感激外下士官ノ事務ハ中々多忙ヲ
 極メテ倦ム盛暇夜更過ミシカモツト人更々増シテヤル
 譯ハイテヤカカ
 郵便物ヲ貰フタ時ノ嬉シサ何トモ云ハナク夕夕家信ヲ
 見タ時ハ又檢別外一枚ノ書書一箇ノ粗吉ナ小包デモ
 ドレ程精神ヲ慰メ得タカ知ラヌ又出征軍人ノ慰問ハ
 必ラカシモ貴重モノハ入ラナイ、永イ美又ヲ要シナイ、
 人数多ク回数多クドレノ慰問易ヤ故國ノ消息ヲ
 出セハ結構外此ハ戦地ニ在ル唯一ノ樂ヲ云ルカヲ

六 通譯 義勇
 微聲ヲ際理解アル人ナラ進ニテ物資ヲ捏造シテ下サツテ
 事ハ卑ク進出氣持ハ進モ良イカラ安便アリ直シト云テ
 毛鏡リ安クハ排ナイガ狡猾十人ニハト口又ハ上手ニ此屋
 ニテ有物ヲモ無イト云ツテ出サナイヲ強引徴發ヲサレテカ
 ラ高價ニ要スルハ高ク排ヒ度ヲモ排ハナナリ
 宿營地ハ歩哨隊附近ニ日暮又ハ暗夜ニテテカラ村ノ後
 掃者ハ悉クノ福ヲ来ルト歩哨兵ハ直ニテ神經ヲナク
 シテ捕ヘテ来ル種々取捕ノ結果逃避ニテ錢銀ニ堪ハ
 不食物ヲ取ルニ差三楢刈ニ戻ツタ農民外カ日中ニ出ルト
 日本兵ニ致サレテ死シカアルカラ能ク夜ニソツテカラ出タノ

ト判明シテ四方苦呵々大笑シタトガ幾度モアタタホ
 等々農民之我カ軍ノ真意ヲ説明シテ聞セバ上宣傳ビラ
 ヲ渡シテ良民ノ復讐方漸沸ヲ頼シテ日増ニ多ク
 復讐シテ書面ニ形ノ惡イ處ガ造リノ紙ノ目老横ヲ手ニ
 持チ四ニシテ、盛ニ楢刈ヌルノヲ見ルト愉快外又
 逃進民ノ復讐者ニ軍ノ疎飯ヲ要學ニテ宣撫ノ一工作
 トスルハ名譽外、疎飯配給ニ一定順序ニ依ラヌカ
 何將モ先ヲ爭フテ大混雜ガレタ老人ノ子孫ヲ押し倒シ
 テ平氣ニ食テ爭フハ利己主義ノ良イ標本外イコラ
 整理シテモ聽カズ銃劍ヲ突出シテ王怒レズニ押寄せセテ
 来ルカラ村ノ奉仕團職員ヲ煩ハシテ説明シテ聽カセ

平昔順ニ整列シテ等ニ配給シ得タ、我利己之ノ貪民モ
 人情義理ヲ知ツテ掩ル外言葉ハ銃劍以上ノ利益トナル
 堪危モアル差々自分ノ言葉不通り怒ム
 或部隊ノ糾改調査ニ行ツタ際ハトッポフ歌ヲ子孫ノ
 若カ聞テ、兵隊ト一語ニ丸大屋撒ツニ此長ル村ノ子孫等
 ハ兵隊センノ音頭取リニ従フテ面白セツテ鏡シヤラ
 ニ傷イテ掩ル外、ソレヲ聞イタ知事モ思ハスニシクシタ
 日該教授ヤ日又教善工作中日本ノ歌モ大切ナ一枚テ
 テル下ヲ忘レテハナラヌカ
 警備地域外、出テ宣撫工作ヲスルニ兵隊サト一レニ出
 ナイト危険外カ一トニ行クト田畑ヲ傷イテ長夕農民ハ

櫻ヶ下ヲ逃ケタリ隠シタリスル、ソレヲ追跡シテ宣撫スルト
 胎ヲ捕下シテ留置シテ喜色満面安ハシメテ見ルト
 通譯ノ力モ大ニ裁ト自勝トシ、
 時ニ急ノ早イ兵隊セハ彼等ノ逃ケ振舞ハ振りテ
 見テ下シ必クス便衣隊カ士兵兵カ敗殘ハ兵カト早ニ居候
 シテ発砲スルト彼等ハ益々懼クテ懸念ニ逃ケル
 〇〇〇〇〇〇〇〇
 ヤウカト云フゾ、時ニハ我が歩哨カ隊ノ
 便衣隊ニ襲撃セシメトモアルカラ中々油断ハ出来ナイ、
 斯クナルト警備モ宣撫モ簡單ニ行ケナクナリ又ソレヲ
 通譯任務ノ重大性ヲ益々痛感シテ密設公認ノ慶應

ノ分ル人が居ル時ハ通ジナク人ニ對シテ三重通譯ヲシヨリ
 筆談ヲヤウタリシテ萬遠懐ノキキキヲ期シタ、去年ニ
 慶東農民ノ大部ハハ漢ニテ遊ツテ揺ルカラ幸ソシテ
 任務ノ思シ得タノハ一安心ナシヨ。

七見々地方ノ慶東

見ナイ地方ハ合ラニカラ見々地方丈述バヤ又、慶東ノ東北
 一帯ハ粘土質カ多ク甘藷ハヨク出来ル新式製糖工場モ
 丁ル粘糖モ有望トシ、米モ出来ルカ西貢米ニ近イ、貧弱ナ
 品種外施肥モ大量ノ自家肥料カ、米種ヲ改良シテ肥境ニハ
 米産ノ前途ハ洋々々々モ分ル、ハナシモ有名カ米同様に感ス
 名品荔枝ハ慶々我境セシテ産ルハ、ハ、モ出来ル、饒沃地

ヲ盛ニ起セハ一層有利ニナリ盛ニナルカ、六七、七八ハ
 早クカラ下ルト見テ集團栽培ハ見エケルカ、自家用トシテ
 甘藷ニ浸植シテハ六ナラナク、甘藷モ概シテ自己ノ廠粉
 工業モ有望カ、造林カ政府ノ獎勵ヲ受テ松カ植エラ
 テアル、相思樹ノ造林ハ寧ろ口有望トヤ、ナカラナク
 然ラシ農民ハ概シテ負債困窮カ、大概十大部塔ニ大船カ
 座カ之液ニ遊ツテ揺ルノヲ見テモ分ル、船座ノ利率ハ月三
 分の年三割ニ及カ、金利ハ高イ富農ト高利貸ノ横行
 ニ任セテ産ルハ氣味毒千萬カ、慶東ノ改良カ行ハナクセ
 道理カ、合作社ノ慶東組カ、建設運動モ相當ニ各
 政府カ盡力シテ民カ銀行カラ借入金高ヲ先決セハ

設立シナイ又ハ設立シ得ナイト来テハ前途遠シカ
 八宮貝戰考加

或日、重慶後突坐出動命令カ出タ、通譯モ一ヨリ行ク
 ノ事ヲ準備シテ出動シタ、宿營地カラ十里位ノ山奥ハ
 トラク行ワ、下車シテ勦テ前進スルト右側ノ水田ニ
 散兵シテ花方ノ小山ニ居ル敵ニ向テ前進シタ、敵ハ上
 機關銃ヲ射出シテ米カソレヲ物トモセシニドロク前進レ
 タ止レ、敵ノ命令カ田圃ニ休テ攻撃スル始メタ、敵時カ
 共機關銃ヲ我カ軍ニ又山砲一门カ後方カラ撃ツテ
 揺ルカ山ニ響ク、砲声、機關銃声ハ連モ壯烈カ、ハ、斯
 ル依歸ハ始メテ又銃聲カ、ハ、飛シ来タ、ハ、高

八宮貝戰考加

或日、重慶後突坐出動命令カ出タ、通譯モ一ヨリ行ク
 ノ事ヲ準備シテ出動シタ、宿營地カラ十里位ノ山奥ハ
 トラク行ワ、下車シテ勦テ前進スルト右側ノ水田ニ
 散兵シテ花方ノ小山ニ居ル敵ニ向テ前進シタ、敵ハ上
 機關銃ヲ射出シテ米カソレヲ物トモセシニドロク前進レ
 タ止レ、敵ノ命令カ田圃ニ休テ攻撃スル始メタ、敵時カ
 共機關銃ヲ我カ軍ニ又山砲一门カ後方カラ撃ツテ
 揺ルカ山ニ響ク、砲声、機關銃声ハ連モ壯烈カ、ハ、斯
 ル依歸ハ始メテ又銃聲カ、ハ、飛シ来タ、ハ、高

飛ハヤツタカラ心配入ラナイト教ヘテシタ射ツテハ逃ミ
 進ニテハ射ツタ敵ノ射出ヲ漸次激シテナン中々逃
 ゲナイハチツクノ音モテハ近イシカラ射ツテ来彈外
 ト面カセタ次ニヒツクノ音ガシタ地ニ落チ彈外ト
 教ヘテ何處ニ後キタカヲ見タカガ一向見エナイニ百
 米位敵前ニテ進ニテ敵ノ戦ハ部ニテタ敵兵ノ姿形ヲ
 類シ見ヤウトシタガ一向見エナカタ激戦紛一時向テ左
 右方ノ高地ヲ占領シタカラ敵ハ後退シテ終ツテ果
 ト進撃シテ或田圃ヲ隔テ又一時向心カリ激戦シテ日
 カ暮シタカラ方休戦シタ

夜ニテ下山シテ地方ノ敵ノ大部隊ハ宿營地ヲ夜襲ス

西文具原印

下約四時間道中ヲ行軍シタ夜半頃目的地ニ着
 イテ一戦シテ餓頭山ヲ占領シタ翌日更ニ敵ノ大部隊
 ニ遭遇シテ激戦ニ時向ノ後シテ撃退シタ其ノ後
 夜襲ニ出テ二面アツタ突ニ進出シテ又重テ作戦ニ
 突戦ニ當リ部隊長敵ノ勇敵ヲ撃破ナ指揮援ヲ
 全軍ノ勇猛ト協力ニ感激シタ又我ガ軍人ノ体力及耐久
 カ強ク上ニイサト云フ時皆一死救国ノ強クイ精神ヲ
 有ワテ花ルカラ鬼ニ金棒ノ日中軍ノ強クイ事ハ勿論
 多ク方面ニテラウカ此等ハソノ重要ヲ部分ヲ占メテ花ル
 ハナイカト思フ

進軍中又激戦中ニ夜軍ノ飛行機ヲ来タ時ハ何ゾノ

一七

送シテト外敵ハ我ガ飛行機ヲ恐レルモ無理ハナイ機
 撃ノ跡ヲ見ルト家屋ハ倒壊シ橋梁ハ潰テ道路ハ切
 断サレルヲ大軍ノ集結又ハ進軍ハ急ク出来ナイカラ激
 撃戦ト云フ美名ヲ付テテソコノ出テハ逃テ逃カハ出ル
 戦法ヲ採リタシセウ

空軍ノ偉力ハ制空トモテ制地モスルノ飛行機ハ現公
 兵差ノ王ト稱シ得ルカラウ

九 敵後國民ノ覺悟

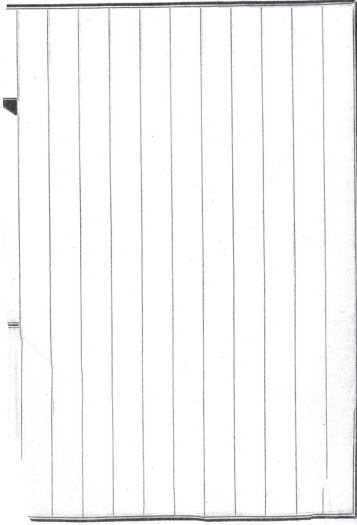
侍従武官長 査閱 陸海軍等軍属ニ 賜贈 煙草ヲ
 賜ハリニテ家旗現職ト共ニ

聖恩ノ高キ感激シ何時モ

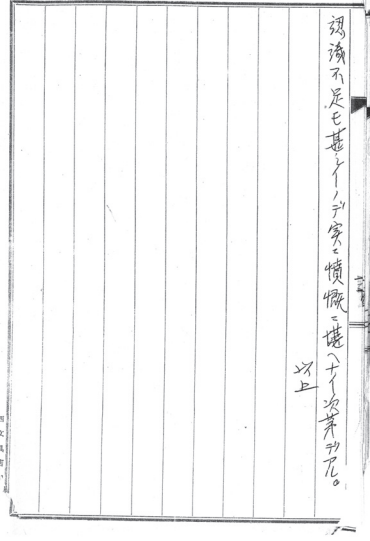
西文具原印

聖恩ノ高キ報シ奉ル心算ヲシテ花ルベク
 戦敗國ノ悲修サテ見ハ誰カモゴント頭ニ響クノハ戦多
 ハ勝ツニ限ルト云フ一念外而シテ其ノ目的ヲ達スルニ強ク
 軍人ノ外支ノ補整内政ノ整備モ必要ナリ況消國
 家ノ總力ヲ強化シナケハ困難ナ事カ、ソレヲ鏡後ノ國民
 トシテハ學ニ戰地ニ於テハ將兵ノ勞苦ヲ考ヘテ飭使ニ留
 意シ精神ヲ訓練シ生産振興ヲ圖リ消費節約ヲ宣
 行シ物資ヲ愛護シテ出征軍人ノ慰問向軍中後援ノ
 現代等ハ寸時モ忘レテハナラニニ發奮三昧ヲシテ
 平氣ヲ花ル無自慢者ヤ時局ヲ善用シテ最有利ヲ負
 ツタリ詐欺強盜ヲ傷イタリスル不徳漢カ花ルナラ

一八



西文真研



汚濁不足也甚
 一ノ空ノ憤慨ニ堪
 以上
 子ノ次ヲ弟也。



廖德聰氏 60歳頃の写真



従軍記念として村人と撮ったもので、真ん中の開襟シャツの男性が廖德聰氏



二列目真ん中が廖德聰氏、南支派遣の頃の家族写真